

まんだら通信

第 237 号 (通巻 272 号)

平成 28 年 03 月 西暦 2016 年 佛暦 2582 年 皇紀 2676 年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



不思議なご縁で

私には保田龍秀という兄弟子がいまして。と言っても、大東亜戦争末期の昭和十九年十一月十七日、フィリピンのレイテ島で小隊長として作戦中に戦死しましたから、会ったことはありません。レイテ島といえば大岡昇平さんの名著『レイテ戦記』が有名ですが、この中で「レイテ島の攻防は、戦略上必要がなかったにもかかわらず、緒戦で敗れ、オーストラリアに逃げ込んだマッカーサーの単なる意地と、日本軍指導部の

無能によって、日本軍八万人以上、米軍数千人の、失わずにすんだ筈の若い命を失うという悲惨な結果となった。」という意味のことを書いていますね。

この戦闘ではまた、食料弾薬を断たれ、飢えに苛まれながら敗走する日本兵、という意味でも悲惨な結果をもたらしました。

この『レイテ戦記』に保田少尉についての記述があります。

敗走中、密林の小川でカニをとった部下が、「小隊長どの、これを食べて下さい」と、その貴重な獲物を差し出した時「私は坊主で殺生は苦手だから、貴様たちが食べるように。」と押し返したという話です。

兄弟子龍秀は館山市佐野地区の生まれで、その頃の清澄寺のご住職、玉瀧義秀さんに人柄の良さを見込まれ、ご自分の名前の一字をお与えになったと聞いています。

紫雲寺にとつては、かけがえのない跡継ぎを失ったことで、後に私の師僧となる、高齡の龍岳和尚の嘆きは如何ばかりだったでしょう。

そのような時「そう言えば、満州で家族を無くした生き残りの子が、すぐ近くにいますよ。」と、世話人さんの誰かが言ったのでしようか。

「お寺で弟子を探しているけど、行ってみるか。」と父親の実家から話がありました。お寺の暮らしなど、どんなところか皆目見当もつきませんでしたが、「上の学校へ行かせてくれるそうだ。」のひと言が決め手でした。

大急ぎで段取りをし、このお寺で親類や世話人さんの居並ぶ中、質素ながら厳かに得度式をしました。昭和二十六年の、三月三日のことでした

尤もその年の秋、体調を崩した師僧は翌昭和二十七年春に亡くなり、少しでも早くお坊さんの資格を取らなければ檀家が困るということになって、「上の学校」は空手形になり、大急ぎで専門道場『成田山勧学寮』に入学することになります。

今、静かに振り返って見ると、人の運命とか縁などというものは実に不思議なものだと、つくづく思います。

若し戦争がなく、兄弟子が健在なら、或いは私の両親や幼い妹が自決をしなればと考えると、これらのあつてはならない出来事があつたお蔭で、類い稀な懐の広い宗教家、弘法大師空海、つまりお大師さまに近づくことになった訳です。

香川県善通寺市にお生まれになったお大師さまは、幼い頃から神童と呼ばれ、一族の期待を担って、一八歳の時、今で言えば国家公務員になるため都の大学に進みます。

夜を日に繼いで、官僚になるための学問である儒教や道教を学びますが、自分に相応しい生き方は、仏教で人々を救うことであるとご決意を固めます。この時お書きになった、世界で始まるの戯曲、国宝でもある『三教指帰』の中で、国家公務員としての出世をひたすら願っているご両親や、一族の期待に背くご自分のお心を説明しております。

大学を退学してから、恐らく四国や吉野などで野や山に伏して厳しい修行を重ねられます。

京都市立芸術大学名誉教授で、文化勲章受章者の梅原猛先生は、レオナルド・ダ・ヴィンチと肩を並べるほどの天才と称賛したそうです。土木・薬学・芸術の業績のどれをとってもその通りと思いますが、私たちの受け取り方は、偉い人にありがちな雲の上の遠いお方ではなく、いつでも気軽に愚痴を聞いてくれる人、親身になって励ましてくれる人ですね。

あれから千二百年余り『お四国』や高野山に、宗派を超えて日本中の人たちが惹きつけられ、『同行二人』のお遍路さんが、今日もひたすら歩き続けています。

東日本大震災五年目

今月の 11 日は、あの大震災から 5 年目になるそうです。

繰り返し放送される東北地方の復興の進み具合が、思う通りではないにせよ少しづつ良くなって行くことに、希望を見いだしている人も多いのではないのでしょうか。

ところが、原発の事故で強制的に避難して、未だに帰れない福島の人たちが大勢います。帰るべきふるさとを目と鼻の先にして、帰郷が叶わない人たちの心情は如何ばかりでしょうか。

而も「年間被曝量 1 ミシーベルト以下」という、科学的といえない厳しい基準のためにです。当時の民主党政権の国賊的といえる避難基準は、取り返しが出来な

い悔いを残している、と私は思っています。

あの時、放射線医学の第一人者中川恵一准教授は「医学的に見て、今すぐに帰っても大丈夫です」と言っていましたし、放射線治療に携わっている他のお医者さんも、同じように断言していました。

大震災のあの年、ロシア政府はチェルノブイリ原発事故についての報告書を発表し「死者の多くは、事故の放射線ではなく、強制避難のためのストレスによるものであった。」と言っています。

国連科学委員会は、1 昨年 4 月「福島での被爆によるがんの増加はないだろう」という報告書を発表し「結論として福島原発事故による放射線は健康被害の原因にはなっていない」「将来も住民や、殆どの労働

者にも健康被害は起こらないであろう」と結論づけています。

アメリカで原子力空母などの修理作業をした作業員 27,872 人 (7.6 ミシーベルト/年) と普通の船の作業員 32,510 人を較べた数字では、被爆した作業員の方がガンの死亡率は 15% 低く、総ての原因では 24% 低くなるそうです。飛行機のパイロットは年間 2~5 ミシーベルトの被爆だそうですが、これも地上の人よりもガンが少ないという結果だそうです。政府が「いつ帰っても大丈夫です」と国内外に宣言するのが一番ですが、政治的に今は無理ということなら、私たち一人一人が「放射線怖い」という迷信から目覚めることが、福島の人たちに安心してもらう早道ではないでしょうか。

につぼん人情小唄 三遊亭鳳豊
第一二二話 看取り

最近、あたりを見回してみしても、ご長寿の方が多いですね。

厚生労働省の昨年の九月の調べでは、百歳以上が全国に六万五千五百六十八人いらつしやつて、その八七・三パーセントが女性だそうです。しかも、この増加のペースがあまりにも急激なので、厚生省は、これまで百歳になったお祝いに差し上げていた銀杯を純銀から銀メッキにすることに決めたというのですから、なんですかねえ。

私も知り合いの百歳のおばあちゃんに、長寿の秘訣をお聞きしました。そしたら、呼吸法ですつてね。それも太陽と関係があるんですつて。おばあちゃん、こ

う言いました。「日の出に向かつて、大きく息を吸うんだ。お天道様の光を吸い込むようになあ。そして、ゆつくり吐く。今度はお天道さまに屈くようにな、ゆつくりと細く、スーッ、スーッと。いいか、ゆつくりな、細く、遠くへ。これを、ながいきという」つて……。

今日は、宮崎のあるお医者さんが僕にくれたお手紙を題材に、お話をすすめたいと思います。「寒中お見舞い申し上げます。今日は、悲しいお知らせです」という書き出しで、先生のお母さんが亡くなられたことを私に知らせる手紙でした。

お母さんは、九十五歳。とても、お元気で、息子さんである先生と奥さん、それにふたりの孫と一緒に暮らしておりました、私は、お母さんの九十五歳の誕生日のお祝いに招かれまして、いっしょに「船頭小唄」かなんか、お母さんと歌いましてね。ご存知ですか、「船頭小唄」。

♪俺は、河原の枯れすすきゝ つていう歌なんですけど、ね、歌い終わりましたら、お母さん、私を指差して「私も古いけど、あんたも古いねえ」つて言ったんで、大笑いになった思い出がありました。でも、そんな調子ですから、まさか、それから半年でお亡くなりになるとは思つてはおりませんでした。

先生のお手紙によりますと、ここ数年、食が細くなつたようで、あまり召し上がらなくなつたそうですが、それも年齢からくるものだと先生も思つていたそ

うです。ところが、ある時、急に熱を出したそうなんです。それで、先生は在宅医療をされている友人のお医者さんに来てもらいまして、点滴をしたんだそうですが、それ以来、お母さんは、寝たきりになつてしまつたそうです。

そうになると、大変ですね。起き上がれませんか、それまで少しだけでもとつていた食事ができなくなります。なぜなら、寝たままでは食べ物の飲み込みができませんから。

この時、さすが、お医者さんですね。

普通なら、救急車を呼んで、病院に連れて行き、点滴で栄養を摂らせるのですが、先生はそのまま自宅で寝かせておくことを選んだそうです。自分で食事ができなくなつた母親に、無理やりに栄養を摂らせることはない。花が枯れていくように、自然に死んでいく。それが、美しい老衰だと思つたそうです。

でも、先生には自分の病院があります。しかも院長ですから、自分の家には夜しか帰つてこられません。そばにいてあげたいけれど、それもできない。その分、奥さんががんばりました。一日二十四時間のうち、十八時間はお姑さんしゅうめのそばにいたでしょう。先生のお姑さんの娘も、学校から帰ると、必ずおばあちゃんのそばについて、何かあつたらすぐに知らせようと介護の手伝いをしてくれました。

幸せなお母さんですよ。私も母を見送りましたが、亡くなる三か月前から病院に入れてしまいましたからね。「お願いします。家に帰してください」と両手を私に合わせた母親の姿がいまでも目に浮かびます。だつて、帰つてきちゃったら、困るのは女房ですからね。「ああ、明日、先生に聞いてみようね」とか言つてごまかしたことが思い出されます。

次第に、先生のお母さんの死期が近づいてきました。お医者さんですから、そんなこと、すぐにわかります。その夜、先生は早めに自宅に帰つてきて、

お母さんのベッドに寄り添いました。「お母さん、大丈夫だからね。いつまでもいっしょだよ」

先生はそうお母さんに声をかけたそうです。すると、お母さんはわかつたのでしう。目をあけて、うれしそうに微笑むと、かすれた小さな声で、先生にこう言つたそうです。「ああ、あんたが私の息子で良かった……」先生の目から涙があふれて止まらなかったといひます。

そして、掛け布団を肩までかけてあげて、「ゆつくり休んで。お母さん、また明日ね」と言つて、先生は涙を拭きながら、自分の寝室に戻つたそうです。

翌朝五時半、先生はいつものように、お母さんの部屋に行きました。まだぬくもりはありましたが、お母さんの脈はもうありませんでした。昨晚、別れた時と同じ姿勢で、穏やかな表情をしていたそうです。

(きつと、安心して旅立つたんだよ。みんな、ありがとう)

先生は、奥さんと二人の娘の肩を抱いて、家族に感謝の気持ちを伝えたそうです。

「君は、最期の時は、お母さんが長年住んだこの家から送つてあげようと言つてくれたよね。ありがとう」

奥さんは、泣いていました。そして、先生は奥さんの言う通り、近親者だけを集めて、葬儀を自宅で行いました。宮崎ではとても有名な先生です。でも、医師会もすべて、報告はあとまわしと決めたそうです。

火葬が終わわり、遺骨を抱いて自宅に戻つた夕方、西の空は真つ赤な夕焼けだったと、私宛の手紙には書かれていました。そういえば、先生のお母さん、私にこんなことを言つていました。

「私が子供の頃はね、夕方になると、空がみかん色になるのよ。その下を蒸気機関車が走ってくるの。もくもく煙をはいてね……。ああ、なつかしいわ」

▼昔、お年寄りが「こんな寒い冬は初めてだ」と言っていました。今年の冬は、同じことを私が言っていました。天気予報のおじさんは「今年は稀に見る暖冬だった」と言っていました。昨日今日、盛んに鳴き始めたウグイス同様春が来たという実感が持てます。▼今月の房総半島最南端の写真は、何年か前館山の中村さんがエンジン付きのパラグライダーで写してくださいました。▼昭和20年3月10日は、東京の下町が絨毯爆撃され、一夜にして10万人が犠牲になつた『東京大空襲の日』ですね。お寺の過去帳には、3月10日という日付のお戒名が何人も記されています。まず爆撃予定地域の外側に焼夷

弾を落として逃げ道をふさいでから、中央に焼夷弾を投下して火の海にする、という残虐な方法をとりました。だから、殺し合いはしてはならないと、心からそう思います。このことは何れ、考えながら書きたいと思っています。朝、編隊を組んで南に帰るボーイングB29のジュラルミンの機体が朝日に映えて、不謹慎ですが美しかった憶えがあります。▼何年か前まではアナグマの被害で困っていましたが、近ごろはイノシシの天下になってしまいました。猫の額ほどの畑に“伝兵衛の姉さん”が、秋野菜の苗を植えてくれて、育つのを楽しみにしてしまひたら、得意の鼻で畑中を掘り返さ

れてしまいました。電気柵などありますが、一番いい方法は青色イルミネーションを付けることだと分かつて、10メートルぐらいの長さのものを買ってきて、張り巡らせたところ、殆どいたずらしくなりました。キュウリ、ナス、トウガラシ、トマト、インゲンなど、そろそろ夏野菜の支度です。▼南房総で春といえば、やはり菜の花ですね。欲張つて、飼っているニホンミツバチも写そうとしたので、どっちつかずの写真になってしまいました。せわしく飛び回るミツバチをしっかりと写すのは、至難の技だと思ひ知らされました。2016.03.06 龍渉

